

# 長野県立歴史館たより

2025年 夏号 vol.123

## 特集

令和7年度夏季企画展

# 安曇野

## AZUMINO

知られざる里山の祈り



# 安曇野 ～知られざる里山の祈り～

会期：令和7年7月5日(土)～8月24日(日)

## はじめに

安曇野といえば豊かな水、広々とした田園風景、常念岳や北アルプスが望める自然を思い浮べる方が多いのではないのでしょうか。しかし今の安曇野のイメージができてあがるのは江戸後期から明治に入ってからなのです。ではその前の安曇野はどうだったのでしょうか。本企画展では安曇野の里山で繰り広げられた「祈り」に焦点をあてます。

企画展の内容を以下ご紹介します。

## いにしへの安曇野



山の神遺跡 (大町国営アルプスあづみの公園内)

時代は約9000年も前の縄文時代。コの字状に並べた配石遺構は国内最古級にあたります。山の神遺跡です。実は大町の国営アルプスあづみの公園の中にあり、再現されています。そこから矢尻のような狩りの道具としてはあまりにも先端が丸い「トトロ石器」が出土したのです。これは祭祀に使われたと考えられていて、山の神では41点もみつき国内最多です。この祭祀は<sup>がきだけ</sup>餓鬼岳を対象にした自然信仰であったと考えられています。

やがて、人々の自然への畏れは、仏教の祈りの世界と結びつ



トトロ石器 県宝 (大町市教育委員会蔵)

いていきます。松川村の観松院には日本でも最古級の仏像、銅造菩薩半跏像があります。さらに長野県最古級の寺院がこの地に建立されました。明科廃寺です。

## 中近世の安曇野

「善光寺仏師」という仏像製作職人集団がどうやら善光寺にいたらしいということが分かったのは、「妙海」の存在が知られたからです。この妙海の最初作といわれる「日光・月光両菩薩像」(県宝)が安曇野市明科の光久寺にあります(表紙参照)。

衣文のキレのある細やかな表現は地方仏師の技量を超えていると評価されています。またそれだけでなく顔の表情もとても端正で惹きつけられるものがあります。

安曇野市穂高には満願寺があります。安曇野の人々は、死後は満願寺からあの世へ行くと信じていました。写真の真ん中に満願寺が写り、写真下には「死出乃山」があります。かつてはあの世とこの世を分かつ山とされてきました。安政年間(1850年代)に

建てられた石灯籠<sup>いしとうろう</sup>の寄進者が北は大町市、南は松本市村井、東は松本市三才山・明科の塔原<sup>とうのはら</sup>までかんでいことから満願寺がいかに広い範囲から信仰されていたのかが分かります。



銅造菩薩半跏像  
国重要文化財  
(松川村 金福山観松院蔵)



穂高組絵図 (当館蔵)

安曇野の有力領主の菩提寺として建てられた真光寺、覚音寺には国の重要文化財にも指定されている仏像があります。

真光寺阿弥陀如来像は、鎌倉初頭の1203年（建仁3年）に滋野一族の発願によって造立さ



阿弥陀如来像 国重要文化財  
(松本市 真光寺蔵)

れたことが本尊体内銘からわかりました。造立銘を裏付けるかのように像様も螺髪は荒く、切れ長の眼、つよい頬の張り、面相は怒ったかのように引き締まっています。実に堂々として安定感があり、いかにも鎌倉風を示しています。鎌倉も初期の段階であり、都の新風が遠く安曇野に伝えられたことを示す貴重な地方作例であると同時に、この本尊によって東信で勢力を伸ばしていた滋野氏が安曇野まで進出していたことが明らかになりました。

大町市八坂の覚音寺には、国指定重要文化財の千手観音菩薩があります。願主は仁科盛家。木曾義仲の側近として京に上り活躍したことが知られています。京武者として安曇野の広範囲を治めていました。平安時代まで遡る仏像様式で、見る者の心を癒してくれる力を感じずにはられません。



覚音寺 (大町市)

## 近世以降の安曇野

冒頭で今の安曇野のイメージができあがるのは江戸後期から明治に入ってからと申しました。拾ヶ堰等、人々の並々ならぬ努力によって堰が開

発され、ようやく田畑ができ、平地部にも多くの村ができたのです。安曇野は長きにわたり水に苦勞をしてきました。

江戸中期になると旅行ブームが起きます。また庚申講や馬頭観音信仰が隆盛を極めます。真光寺は庚申講本山でもあります。安曇野の人々は真光寺を訪れ、青面金剛の軸をいただきます。人々はそれを壁に掛けて、庚申講を行いました。

明治維新に伴って出された神仏分離によって廃仏毀釈が広がります。松本藩は全国でも最も強行策をもってすすめ180寺中、実に140寺余が廃寺となりました。そして新しい時代の象徴となった小学校の校舎にその廃寺の木材が使われました。国宝に指定されている旧開智学校校舎の階段にも廃寺した全久院の木材を使った丸太柱が使われています。

## 終わりに

古代の遺跡を見ても安曇野は祭祀に使われたであろう土偶や土器が多く出土しています。祭祀具が多いということは、それだけ苦難の歴史があったということを物語っているのかもしれませんが。

今回の企画展では、この他、県宝となっている縄文土器「広耳把手付土器」（把手に円い透かしが施されたデザイン）や、弥生時代の再葬墓遺構



広耳把手付土器 県宝  
(安曇野市教育委員会蔵)

に穴に栓つき!?)、安曇野で最古の火葬骨壺となる山寺廃寺の四耳壺（県宝）、他にも寺院に残された武田信玄や織田信長の朱印状も展示します。

この夏、長野県立歴史館が祈りの聖地となります。800年以上も継承され、大切にされてきた仏様に手を合わせてください。そして心癒されながら安曇野の新たな歴史と魅力を発見してください。

(小林寿英)

令和7年度

# 常設展示のご紹介

## » 原始 ～滑石ロード 縄文前期の玉づくり～

信州の原始時代にとって、不可欠な文化要素のひとつに、信州産黒曜石を用いた石器づくりと流通・交易があります。黒曜石は3万年以上も昔の後期旧石器時代から使用がみられ、縄文時代前期後半には鉱脈の採掘が始まったとされています。およそ6千年前に「信州の鉱山史」が幕をあけることとなります。縄文人が採掘した黒曜石は、関東や北陸のみならず、西は福井県、北は青森県や北海道まで行きわたっていたと言われていいます。考古学研究者は、そうした黒曜石（黒曜岩＝Obsidian）の動く道を「オブシディアンロード」と称して、文化を探求しています。一方、信州の縄文時代には、もうひとつ石の道がありました。やはり縄文時代前期に本格化する「滑石(talk)の道」です。縄文前期は定住化が進み、食料の確保や物流が発達、生活が安定していった時代です。そうした中で「石製装身具」が盛行し

ていきました。管状や平たい楕円形状の小さな有孔製品のほか、「玦けつ状耳飾じょうみみかざり」と呼



数沢Ⅰ遺跡 玉類製作資料他(大町市蔵)

ばれる特殊な製品が作られました。それらは信州産とみられる滑石を用いることも多く、北信地方の西部域、姫川や高瀬川流域に生産遺跡が集中しています。白馬村舟山遺跡、大町市一津遺跡・藪沢遺跡、松川村有明山社大門北遺跡などです。これらの遺跡で製作された玉類が、信州の各地まで行きわたっていたと考えられます。まさに「滑石ロード(タルクロード)」と称してよいと思います。採掘鉱山は未確認ですが、今後県内の滑石産出地周辺で発見される可能性があるかも知れません。

(町田勝則)

## » 古代・中世 ～小笠原氏と国人の争い 大塔合戦～

南北朝合一の後も信濃の国人領主達は、室町幕府に従順なわけではありませんでした。1400年(応永7年)、新守護の小笠原長秀は、信濃支配を強めるため京から同族である佐久郡の大井光矩なかつりの館(佐久市)に入り、信濃中の国人領主達に協力を求めました。しかし、長秀の強引な手法や高圧的な態度に、村上氏・井上氏・高梨氏・仁科氏ら北信・東信の有力国人領主達を中心に反発を招きました。信濃の国人衆は中小国人領主とも手を結び、横のつながり(一揆)の連合組織をつくり長秀に対抗しました。これを大文字一揆といいます。

大文字の旗は、もともと香坂氏の菩提寺である牧島の興禅寺(信州新町、香坂氏の菩提寺)にあったもので、大文字一揆の旗印として伝えられています。原本は江戸時代以降のある時期に前所有者

であった大日方家に伝わり、その後歴史館に寄贈されました。1997年(平成9年)には全国でもきわめて珍しい国人一揆の旗として県宝に指定されています。結果的に国人衆の頑強な抵抗で長秀は何とか京へ戻りはしましたが、守護職を解任されるという事態に至りました。この戦いは単に守護を国人が追いだした、という意味を持つだけではなく、その後の関東における内乱のはじまり、そして応仁の乱へと続く全国内乱への序章とみられることもできます。



大文字の旗 県宝  
(当館蔵)

(黒川 稔)

## 》 近世 水と村 ～江戸時代の治水と利水～

江戸時代になると、幕府・諸藩の新田開発奨励策に伴い、堰の開発や用水路の開削が行われました。信濃国内でも、拾ヶ堰、御影用水、五郎兵衛用水などが知られるところです。

拾ヶ堰や五郎兵衛用水が世界かんがい施設遺産に登録されていることをご存知でしょうか。

小テーマ「水と村」では、安曇郡の拾ヶ堰の関連資料を展示します。拾ヶ堰とは、安曇郡南部の10ヶ村（成相村・吉野村・新田町村・上堀金村・下堀金村・柏原村・矢原村・保高村・穂高町村・等々力町村）を貫通していることがその名の由来となっています。

当時の文書や絵図を読み解くことで、かつての流路や堰、取水口などが分かるだけでなく、いかに水が人々の生活にとって大切なものであったかが分かります。

安曇野市文書館蔵の「信州安曇郡保高組合見取絵図」には、等高線に沿って開削された横堰の様子を確認することができます。そこでは、拾ヶ堰が「柏原堰」という名称で描かれています。

当展示では、他にも拾ヶ堰の要所が記された絵図や航空写真を展示します。当時の人々の苦労が現代の姿にどのように生きているかをご覧くださいと思います。（中山 敦）



信州安曇郡保高組合見取絵図（パネル展示 原本安曇野市文書館蔵）

## 》 近現代 中山晋平作曲集 ～今も歌い継がれる珠玉の作品たち～

常設展示室近現代コーナーでは、中山晋平作品集を展示しています。

中山晋平は1887年(明治20年)、長野県下高井郡新野村（現中野市大字新野）に生まれました。小学校の教員を経て上京し、新進の学者島村抱月のもとに書生として住み込みます。21歳で東京音楽学校に進学、このとき同学校で教鞭をとっていたのが同郷の高野辰之でした。

本格的に新劇運動を進めた抱月は、長野市松代町出身の女優松井須磨子と共に芸術座を旗揚げし、1914年(大正3年)にトルストイの小説をもとにした『復活』が評判となりました。晋平がはじめて作曲した劇中歌「カチューシャの唄」も大ヒットとなり、作曲家人生の始まりとなりました。その後教員生活を送りながら作曲家として「ゴンドラの唄」など様々な流行歌を創作した晋平でしたが、抱月と須磨子の死によりひとつの分岐点を迎

えます。

大正後期から戦前にかけては「てるてる坊主」、「シャボン玉」などの童謡をはじめ、大正末期から各地にブームとなった〇〇音頭、〇〇小唄などの新民謡を数多く創作します。

中山晋平作曲集は、流行歌、童謡、新民謡のそれぞれの歌詞が書かれ、装丁は大正期を代表する画家竹久夢二が担当しました。華やかな流行歌から、温かみのある童謡、地域の人々に寄り添う新民謡まで、中山晋平が情熱を注いで作り上げた曲の数々に思いをよせてご覧ください。

（林 誠、鈴木幸香）

「カチューシャの唄」1914年  
（当館蔵）



# 土器文様にみられる地域性

考古学では、土器の文様や形などに共通な特徴を持つグループを「型式」と呼び、これを時期や地域的まとまりを把握するための手がかりとします。土器型式の名称の多くは遺跡名から命名しています。

今回は、佐久地域の浅間山麓に特徴的な縄文時代中期中葉の「焼町式土器」と中期後葉の「郷土式土器」を取り上げて、その文様の類似性について考えてみたいと思います。

焼町式土器は、塩尻市の焼町遺跡から出土した土器から命名されましたが、浅間山南麓にある北佐久郡御代田町の川原田遺跡から多量に出土したことをきっかけにして、その後の研究で浅間山麓をとりまく、佐久地域をはじめとする東信から群馬県地域を中心に分布することが判明してきました。

メガネ状やドーナツ状などの突起が付いた把手と渦を巻く曲隆線、曲隆線の間を埋める刺突点などで文様を構成した、装飾



郷土遺跡 焼町式土器（当館蔵）

性豊かな土器です。約5000年前の縄文時代中期中葉に盛行しました。

中期後葉になると浅間山麓では関東地方の加曾利E式土器が主体となりますが、しばらくして登場するのが郷土式土器です。郷土式土器は、川原田遺跡と同じ浅間山南麓にあり、4 km程離れた小

諸市の郷土遺跡から出土した土器を標識としています。

郷土式土器の一番の特徴は、胴部文様の地文として、魚の鱗のようにカーブした短い沈線を描いていることです。

当館の2012年度(平成24年度)秋季企画展『縄文土器展』を担当した賛田明氏(現長野県埋蔵文化財センター飯田支所長)は図録のなかで、この鱗状短沈線を同じ浅間山麓の焼町式土器にみられる曲線に通じているのではないかと指摘しました。これは鋭い指摘で、太い粘土紐を曲がりくねらせて器面に貼り付けた「沈線」の焼町式土器と器面に鱗のように刻んだ「沈線」の郷土式土器という違いはありますが、ともに「曲線」を意識していることが読み取れます。

焼町式土器が姿を消してから郷土式土器が登場するまでには一型式程度の時間的間隙があります。そのため直接には連続してはいま

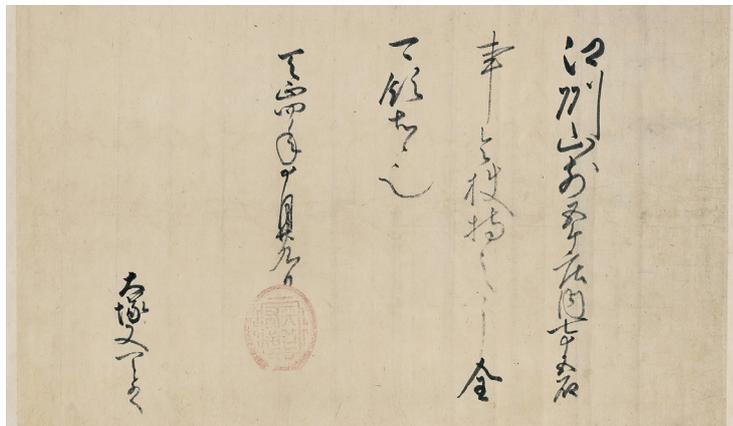


郷土遺跡 郷土式土器（当館蔵）

せんが、分布の中心は、ともに浅間山麓にあり、「曲線」を土器の文様にあらわすという意識が潜在的にこの地域には残っていたことを示しているのではないかと私は考えています。

このように土器文様には地域性も内包されていたのです。(櫻井秀雄)

## 織田信長朱印状と大塚又一郎



天正4年10月29日「織田信長朱印状」(個人蔵 当館寄託)

県立歴史館は昨年開館30年を迎えることができました。当館は博物館であると同時に、公文書館機能を持つ唯一の県立施設としても認知されています。公文書館は、公文書を保管・管理することは言うまでもないですが、地域史料と呼ばれる古文書も収集の対象としています。こうした民間史料もまた、行政文書とともに地域や住民の歴史を解き明かすことのできる重要な手がかりであるからです。現在当館は34万点を超える地域史料を収集・保管し閲覧や展示に供しています。

34万点のうち、もっとも点数として多いのは「寄贈」による収集史料になります。また、古書店などの売り立て目録に掲載された県内外に散逸した文書(文書が地域から離れた、という意味で便宜的に「流出文書」と呼ぶ)に対し、予算を計上して次年度に「購入」しようと計画をしています。また2023・24年度(令和5・6年度)の2ヶ年には、クラウドファンディングを通じて、「武田晴信書状」・「真田昌幸書状」を購入できました。

さて、一昨年のクラウドファンディングの取り組みを通じて、名古屋市在住の方(Aさん)から次のようなご連絡を頂きました。Aさんは、史料の散逸を防ぎ、次世代へ古文書を継承しようという当館の取り組みや理念に対して、とても共感

していただきました。そしてAさんからご自身が入手した古文書7点を当館へ寄託したい、という申し出がありました。その収集された古文書とは、武田信玄書状・上杉輝虎(謙信)書状・北条氏政書状写・織田信長朱印状・羽柴秀吉書状そして千宗易書状でした。一度や二度はその名を聞いたことはあるでしょう。これらの文書は、万一盗難に遭ったり、自然災害で滅失する危険性もあります。かつ

てのような大きな土蔵もありません。

前置きが長くなりました。Aさんから寄託された文書のなかには、これまで知られていなかった「織田信長朱印状」がありました。印形は馬蹄型の「天下布武」印。奥野高廣『織田信長文書の研究』でも採録されていない新出文書です。

この文書は1576年(天正4年)2月に信長が安土城に入った後のものです。宛先は大塚又一郎。信長は又一郎に近江国山前五箇荘(滋賀県近江八幡市)のうち75石を与えるので知行を全うするよう命じました。形状は縦紙。文末が「候也」、漢字で「～殿」とすべきところを「との」表記、大塚の充所もその位置が低く、75石という軽輩に見合う書札といえます。大塚氏は近江国蒲生郡大塚(滋賀県蒲生町)を出自とし、「信長公記」には播磨国神吉城(兵庫県加古川市)攻めの検使として、次いで1582年(天正10年)6月2日日本能寺の変では森蘭丸などと共に戦死、と記されます。信長の近くに伺候する馬廻衆だったのでしょう。

写ながら同日付で信長から領知を給付された者に岡部長左衛門、坂井文助がいます。これらから、この年の安土入城に伴う新家臣の登用と近習への配置が読み取れます。

(村石正行)

# INFORMATION

## インフォメーション

### ■2025年(令和7年)6月～9月の行事予定

6月

休館日  
2・9  
16・23  
30

#### 企画展・所蔵品展

##### 令和7年所蔵品

**原始**  
～開館30年のあゆみ展～  
～6月15日(日)まで開催中



#### 講座・イベント

##### 古文書講座

初級 A 第2回 6月22日(日)  
B 第2回 6月19日(木)  
中級 A 第2回 6月21日(土)  
B 第2回 6月19日(木)  
上級 第2回 6月28日(土)

##### 考古学セミナー

6月1日(日) 13:30～  
「考古学の可能性を探る」  
林 直樹氏 (第49回藤森栄一賞受賞者)

##### 県立歴史館講座①

6月7日(土) 13:30～  
「今、信州の旧石器がおもしろい！」  
大竹憲昭 (当館考古資料課)

歴史館出前講座① IN箕輪町\*  
6月28日(土)

古文書出前講座② IN諏訪市博物館  
6月29日(日)

7月

休館日  
7・14  
22・28

#### 夏季企画展

**安曇野**  
～知られざる里山の祈り～  
7月5日(土)～8月24日(日)

##### ■企画展講演会①

7月12日(土) 13:30～15:00  
「安曇野の寺院と仏たち」  
講師：武笠 朗氏 (実践女子大学教授)

##### ■企画展講演会②

7月19日(土) 13:30～15:00  
「安曇野の中世」  
講師：逸見大悟氏 (安曇野市教育委員会)

##### ■企画展ギャラリートーク

①7月26日(土) 各13:00～14:00  
②8月16日(土)

##### ■企画展ギャラリートーク

プラス 映画「RYOと彩の安曇野水物語」  
8月9日(土) 10:00～12:00

##### ■イベント

「仏像スケッチコンテスト」  
開催期間中

##### 古文書講座

初級 A 第3回 7月20日(日)  
B 第3回 7月17日(木)  
中級 A 第3回 7月19日(土)  
B 第3回 7月17日(木)  
上級 第3回 7月26日(土)

##### 県立歴史館講座②

7月5日(土) 13:30～  
「夏季企画展 安曇野～知られざる里山の祈り～」  
小林寿英 (当館総合情報課)

古文書出前講座③ IN諏訪市博物館  
7月27日(日)

##### 古文書講座

ティーンズ 第1回 8月1日(金)  
第2回 8月2日(土)  
初級 A 第4回 8月31日(日)  
B 第4回 8月28日(木)  
中級 A 第4回 8月30日(土)  
B 第4回 8月28日(木)  
上級 第4回 8月23日(土)

##### 歴史館で夏休み

8月2日(土)  
各種イベント

##### ティーンズ考古学講座

1回目 8月7日(木)  
2回目 8月8日(金)

古文書出前講座④ IN諏訪市博物館  
8月24日(日)

8月

休館日  
4・12  
18・25

9月

休館日  
1・  
8～18  
22・24  
29

9月8日(月)～9月18日(木)は  
全館くん蒸のため休館となります。

##### 古文書講座

上級 第5回 9月27日(土)

##### 県立歴史館講座③

9月6日(土) 13:30～  
「信州の旧石器を掘る！」  
鶴田典昭氏 (おぶせミュージアム・中島千波館館長)

歴史館出前講座② IN大桑村\*  
9月27日(土)

#### 表紙写真の解説

#### 妙海「月光菩薩立像」(県宝)

(文保元年・1317年 安曇野市明科中川手 光久寺蔵)

善光寺仏師妙海の最初作といわれている。仏像をみるとまずはその可愛らしい表情が印象的だが、彼の個性は特にうねりの強い衣文表現にみられる。今回の調査で初めて台座内部に「妙海生年三十四」という墨書銘が発見された。妙海の仏像制作年齢を確定する上で有力な情報である。企画展ではその衣文表現と墨書銘にも注目いただきたい。

## 行事アルバム

### \*\*\*\*\* 歴史館でこどもの日 \*\*\*\*\*



5月5日(月・祝)は、「歴史館でこどもの日」として、「プラ板マスコット」作りを開催しました。好きな土器や土偶のイラストを選んで、好きな色を塗って、世界に一つだけの特別なアイテムを作りました。たくさんのご家族に来館していただき、子どもたちの一生懸命取り組む姿を見ることができました。

### \*\* 開館30周年記念 令和7年所蔵品展 原始 ～開館30年のあゆみ展～



令和7年所蔵品展が6月15日(日)で終了いたします。30周年記念の最後を飾る展示に、たくさんの方にご来館いただきました。観覧された皆様から「今の技術では到底かなわないと思うものがたくさん見れて良かった」、「土器の変化が分かりやすく、見応えがあった」などの感想をいただきました。今年度の3月は令和8年所蔵品展「長野県民の戦後再出発」の開催を予定しています。ご期待ください。

## 長野県立歴史館たより 夏号 vol.123

2025年(令和7年)6月1日発行  
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市大字屋代260-6  
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996  
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp  
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 有限会社アツツーロ